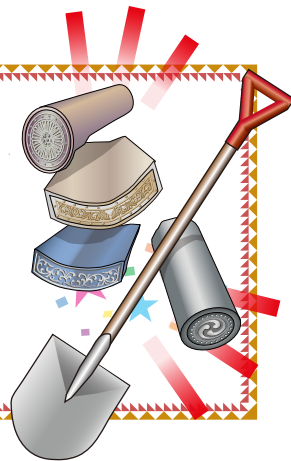


山科本願寺南殿跡（第11次）

調査期間：令和4年9月26日（月）～ 10月6日（木）

調査機関：京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課



1 発掘調査について

山科本願寺南殿跡は山科区音羽伊勢宿町周辺に広がる埋蔵文化財包蔵地（遺跡）です（図1）。この遺跡内において、個人住宅新築工事が計画され、当該地が推定される山科本願寺南殿跡の西端に位置し、堀や土塁などの区画施設の痕跡が地中に残されている可能性があったことから、発掘調査を実施しました。

発掘調査は令和4年9月26日から10月6日まで実施し、現地での実際の作業日数は8日間、調査面積は15㎡です。

2 山科本願寺南殿跡について

山科本願寺南殿は本願寺中興の祖ともいわれる蓮如によって造営された隠居所です。蓮如は文明10年(1478)に現在の山科区西野山階町一带に本願寺の造営を開始し(山科本願寺)、文明15年(1483)までに主要堂舎が揃い、周囲には寺内町が形成されました。延徳元年(1489)、この山科本願寺の東方約1kmの地に蓮如は隠居所である南殿を築きます。東方にありながら「南」殿とされたのは、本願寺がかつて東山大谷に所在したところ、南側に隠居所が設けられたことに由来すると言われています。この南殿も本願寺本体と同様に土塁と堀で囲まれ、中心には庭園が営まれました。光照寺の境内には現在でも土塁と堀、さらに築山と池跡が残されています。天文元年(1532)には、勢力を増す本願寺に対し、洛中の法華宗徒(法華一揆)と管領細川晴元が手を結び、さらに近江守護六角定頼と連合軍を形成して山科に攻め寄せました。この攻撃によって、南殿は山科本願寺とともに焼亡したとされます。

平成14年度の発掘調査で山科本願寺南殿に関連する遺構が良好に遺存していることが判明し、その後国史跡に指定されました。現在の遺跡範囲は絵図(図2)に基づいて推定されたものですが、近年の発掘調査成果と地割との対比から絵図に描かれた縮尺が必ずしも正確なものではなく、音羽伊勢宿町の町域がほぼ山科本願寺南殿の範囲を示すのではないかと考えています(図3)。

3 今回の発掘調査成果

今回の調査地は、新復元案において山科本願寺南殿の西端に位置します。絵図では南殿の周囲は、「水ヨケノドキ」すなわち土塁で囲まれ、さらに西と南には「カマヘ口」という鳥居状の構造物が描かれています。これは門のような施設であったことが推測されます。調査区内でこれらの囲郭施設を確認できる可能性がありました。

土塁や堀の有無を確認するため、推定される外郭線に直交する東西方向の調査区を設けました。結果、土塁や堀を調査区内で確認することはできず、外郭線は少し西側に広がる可能性が高まりました(写真1)。しかし、調査区西端で柱痕跡を確認しました(写真2)。柱跡に入った土は焼け土を含んでいました。山科本願寺及び南殿が焼き討ちによって焼亡したことを想起させますが、遺物は出土しておらず、遺構の時期確定はできていません。しかし、これが南殿の時期と仮定すれば、外郭沿いになんらかの構造物があったこととなり、防御施設などの内部構造の一端を確認している可能性もあります。

山科本願寺南殿跡は絵図と現況の地上遺構からその範囲、姿が復元されてきましたが、近年発掘調査成果が蓄積されてきました。その復元も新たな展開を迎えています。(新田和央)

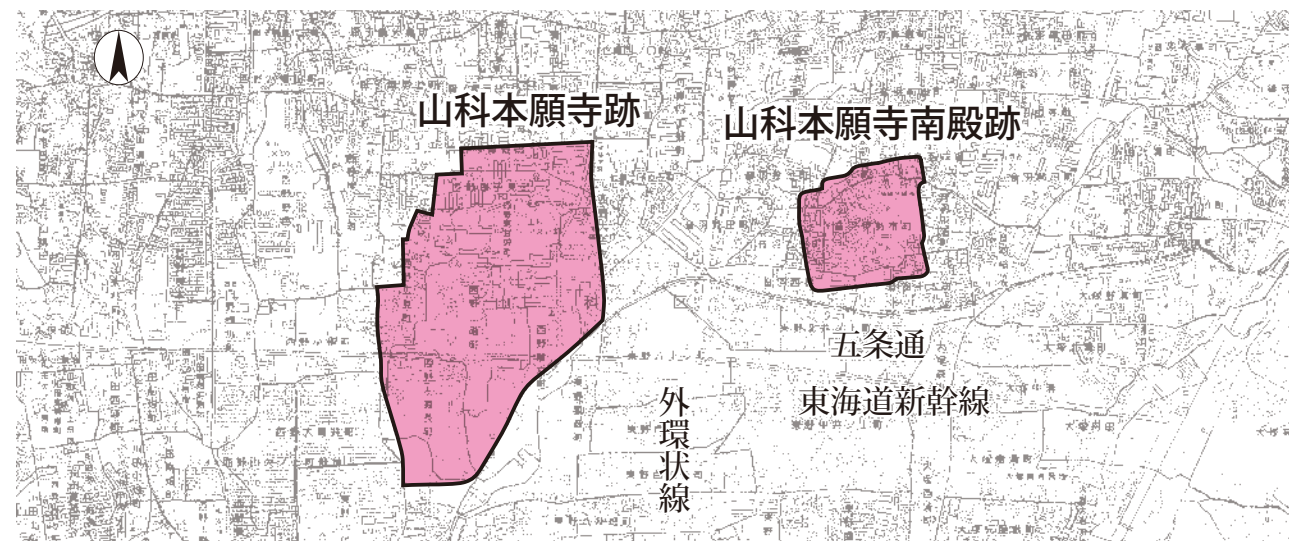


図1 山科本願寺跡と南殿跡 (1:20,000)

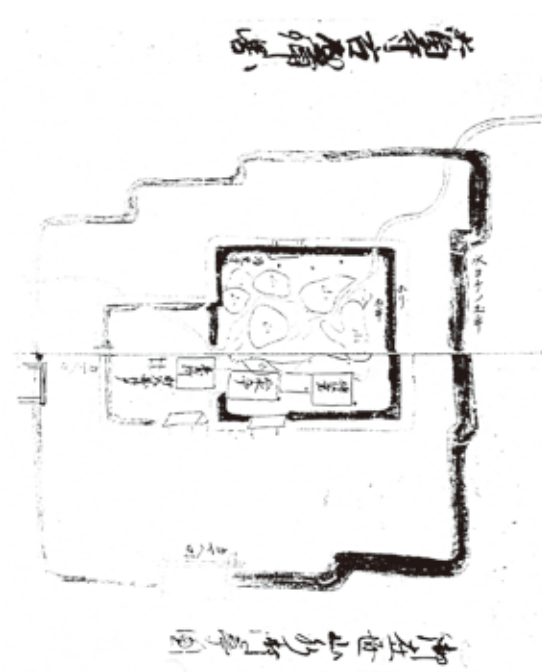


図2 御在世山水御亭図(光照寺所蔵・上が北)

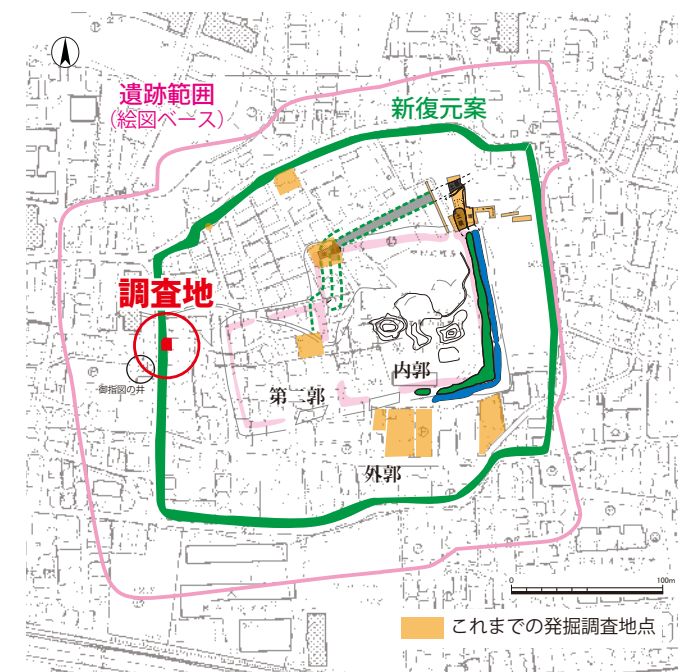


図3 山科本願寺南殿跡の復元と調査地 (1:5,000)



写真1 調査区全景(東から)



写真2 柱穴断面(南東から)